

令和4年度 第3回 学校運営協議会議事録

校名	府立むらの高等支援学校
校長名	森本 裕

開催日時	令和5年1月23日（月）15時00分～17時00分
開催場所	共用棟2F 会議室
出席者（委員）	（会長）荒木 寛巳 （副会長）大森 千枝 （委員）石神 彰人 上國料 洋子 三瀬 吉彦 柏木 光枝 ※順不同、敬称略
出席者（学校） ※回覧	（校長）森本 裕 【事務局】（教頭）野村 佳津 （事務長）清水 幸雄 吉田 聖名子 速水 彬裕 重松 亮 活田 侑 阿南 幸佑 遠藤 幸子 上田 航 岩里 哲朗 藤川 泰生
傍聴者	なし
協議資料	②令和4年度学校教育自己診断の実施結果及び分析・考察 ③公開授業週間アンケート集計結果 ④令和4年度学校経営計画について ⑤令和5年度学校経営計画（案）について ⑥学校経営計画中期の目標 新旧対照表
備考	後日、議事録を学校ホームページで公開

議題等（次第順）
<p>1) 校長挨拶</p> <p>2) 報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和4年度学校教育自己診断結果について（資料②）〔教頭〕 ・公開授業週間アンケート集計結果について（資料③）〔教務部長〕 ・後期授業参観週間アンケート集計結果について（資料④）〔教務部長〕 <p>3) 協議</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和4年度学校経営計画及び学校評価（案）について（資料⑤）〔校長〕 ・令和5年度学校経営計画（案）について（資料⑥）〔校長〕 <p>4) 意見交換</p> <p>5) 校長挨拶</p> <p>6) 諸連絡（事務局より）</p>
協議内容（質問・意見の概要）
<p>【委員による協議】</p> <p><令和4年度学校経営計画及び学校評価（案）、令和5年度学校経営計画（案）の承認について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「実習や雇用先の職場マッチング」、「関係機関との連携をより密にする」ことは、すごく大事で良い方向に向かっている。より具体的になり、非常に分かりやすい表記になった。長く働き続けることは大切だが、一方、時代の背景と共に「労働力は流動性のある物だ」と捉えられてきている面もある。若い18歳での就職なので働き続けられなくなった時の相談ルートも、障がい者就業・生活支援センターとの連携も含め、引き続き大事にしてほしい。 ・公開授業などを通じて学校の取り組みを中学校等へも発信していく新しい項目が取り上げられているのも大変良いことだと思う。 ・実習や生徒同士の関わりを通して、在学中に成功体験を得ることができたら良い。 ・大阪府PTA 要望事項に「就労後、学校に相談できる場を作ってほしい」を挙げた。会議では「そのために障がい者就業・生活支援センターが・・・」という意見もあったが、学校という場所が一番、生徒にとって相談に行きやすい場なので、ぜひ実現してほしい。 ・校務の効率化、働き方改革、心身の健康維持などの項目もあるが、むらの場合、教員が少数なので、どうしても進路指導やアフター支援などを担当する先生方などに負担がかかってしまうことを危惧している。子どもだけでなく、教員同士でも相談できる関係づくりも必要になってくるのではないかな。府立支援学校では病気休暇も多くなっているため、教員の健康状態のことも含めて、学校経営計画に基づいた実践を進めてほしい。 ・皆さん、異論は無いということで承認いたします。

【委員による意見交換】

<公開授業の対象について>

・公開授業の案内対象を広げたと報告があったが、高等学校の参加ケースはありましたか？高等学校にも支援教育の必要な生徒が多く入学してきている実態がある。

→（回答）北河内の府立学校には案内を出したが、今年度の参加校は無かった。

<共生推進教室について>

・共生推進教室の生徒のアフター支援は誰が担当しているのか？

→（回答）共生設置校の教員が基本です。相談があれば対応している。

・学校教育自己診断でも否定的な回答が多いように感じるが、共生の生徒のケースをむらのの教員が共有（情報交換）することはありますか？

→（回答）在学中のスクーリング日にはリーディング・スタッフが窓口となり共生担当と情報交換を行っています。障がい受容に難しさを抱えている生徒が多く、学校教育自己診断アンケートの結果にも反映されているのではないかと受け止めている。

・子どもが中3の時に共生設置校に見学に行った経験がある。高校で生活できる生徒が週一回、就労をめざした作業実習の授業が多いむらのに来て戸惑うのは当然ではないか。子どもだけでなく、保護者もスクーリングの意味を理解しきれていないのではないか。まずは保護者が理解を進めていくべき。正直、共生推進の制度に疑問がある。

→（回答）自立支援コースと異なり、高卒資格が取れないこともあり、定員割れケースも多い。制度自体が一つの曲がり角に来ているのは事実かもしれない。

・むらのの課題と言うよりは府の課題であろう。むらのは本校生を中心としながら共生との関わりを考えていくことが必要だと考える。

・共生の「障がい受容の難しさ」の分析について、むらのの教員が支援できる部分があるのではないかと感じた。障がいを悪いことと捉えず、自分自身を受け入れる、自己肯定感を上げていくことは大前提だが、失敗を乗り越える力や、失敗は悪いことではないことを学生の間にしっかりと学んでほしい。その力が社会に出てから大いに役立つと思う。

・障がい者就業・生活支援センターとしては共生の方の新規登録に対応している。センターには市役所などから勧められて、本人はよく分からずに相談に来るケースが多い。相談に来る時は障がいをオープンにしている、就労にあたっては障がいをクローズにしたいというケースも多い。

<「相談できる先生がいる」について>

・診断結果は77.9%で約6%下がっているとなっているが、子どもたちの捉え方としては、就労の相談はできても恋愛関係など様々な相談もあるだろうから低い数字とは言えないと思う。先日の3年生の成果発表会を見ていても、むらのの生徒は素直で、本当に頑張り屋さんだと思う。日々、先生方が生徒たちと向き合ってくれていると私は思っている。

<今後の展望（まとめ）>

・在学中の生徒の変化から課題を見つけた時に、何をどのように取り組んでいくのが大事になる。

・むらの周辺地域の開発も進む中、地域の特色を生かす学習や行事など、今後、さらに新しい取り組みも出てくるだろう。

・高等支援学校に入学してくる生徒は療育手帳を持っている。しかしながら、他の学校では手帳を持たない生徒や生活事情を抱えている生徒などが多く在籍している。そのような相談、支援もキーポイントになってくるのだろう。

・いつも運営協議会で出された意見や課題に、すぐに取り組んで対応されているが、10年後のむらのを視野に入れた計画を考えていくことも大切になるだろう。

・就労後、躓いた時にどう相談し、立ち直っていくのか。そのためには在学中に何を学ばばよいのか。むらのの高等支援学校の教育活動の活性化に向けて、より進めてもらえればと思う。